

## 日本的和漢、漢和聯句與韻書之管窺

辜玉茹

中國醫藥大學通識教育中心 副教授

### 摘 要

日本的室町末期(1336-1573)到江戸初期(1603-1867)是和漢、漢和聯句流行的全盛時期，也就是日本的和歌跟中國的詩相互對應的一種言語遊戲。自古以來日本的文字、文學就深受漢文的影響，韻書的應用當然也不例外。隨著環境的改變，日本的中世時代，日本人以《廣韻》為底本，改編了一本屬於自己的韻書——《聚分韻略》。此書在日本辭書史上佔有相當重要的地位，當代除了中國來的辭書以外，就屬這一本了。但到了和漢、漢和聯句流行的全盛時期，更編纂了這一類的專門韻書，如《和訓押韻》(「十一韻」)、《韻字記》《韻字之書》(「十二韻」)、《漢和三五韻》(「十五韻」)、《和訓三重韻》《和語略韻》(「三十一韻」)等韻書，因時代久遠，考究困難。

筆者從「十一韻」的形成到「十五韻」的演進，就當代最受歡迎並廣為閱讀的中國詩以及「十一韻」形成前的和漢、漢和聯句等的押韻情形，作了詳細的考究。令人驚訝的是其押韻的使用頻率，依序由「十一韻」的「東、支脂之、虞模、真諄臻、寒桓、先仙、蕭宵、麻、陽唐、庚耕清、尤侯幽」的韻目使用頻率最多，「十二韻」裏追加的「元魂痕」韻目居次之，「十五韻」裏再追加的「冬、灰、歌」韻目居第三位。除此之外，《聚分韻略》裏的各項韻目的數量也是由多至寡的順序，取自「十一韻」的韻目，一直追加到「十五韻」的韻目。

拙文，廣泛而明確的探討「十一韻」的韻目形成，演進到「十五韻」的韻目之過程，使今人對當代的文藝活動有更進一步的瞭解。

關鍵詞：十一韻、十五韻、和漢聯句、漢和聯句、韻書。



## 中近世における日本の韻書の利用

### — 和漢聯句・漢和聯句のための韻書 —

#### 一、和漢聯句・漢和聯句の変遷

和漢・漢和聯句とは、中国から伝わってきた聯句と日本固有の連歌とが、それぞれ本来の形を保ちながら結びついてできた連句文芸（言語遊戯）の一種である。

日本の連歌は、一首の歌を上句と下句とにわけて、ふたりが応答して詠む詩歌ということであるが、『古事記』（729）『日本書紀』（720）所載の「にひはりつくばを過ぎて幾夜か寝つる/かがなべて夜には九夜日には十日を」の日本武尊と御火焼の老人との片歌の問答に連歌の起源を求めた<sup>1</sup>ため、筑波の道ともいう。中近世においては聯句（連句）の中で連歌と漢詩とを交え連ねる形式を「和漢・漢和聯句」というのである。

中国の聯句の起源は、漢の武帝らの「柏梁台聯句」と言われているが、清の趙翼の『陔餘叢考』23<sup>2</sup>に、聯句のことを、

雪浪齋日記云：退之聯句，古無此法。自退之斬新開闢。苑景文亦云：昌黎聯句，有跨句者，謂連作第二第三句，如城南等作是也。有一人一聯者，如有所思等作是也。漁隱叢話則云：謝宣城有聯句七篇。陶淵明有聯句一篇、是六朝已有之。然聯句究當以漢武柏梁為始。文心雕龍曰：聯句共韻柏梁餘製是也。

と述べている。「柏梁台聯句」が究極的に始めたが、韓愈（字は退之。号は昌黎。）が新しい歌風（聯句）を興して、世に伝わってきたこと

<sup>1</sup> 『古語大辭典』角川書店 平成6年（1994年）。

<sup>2</sup> 趙翼『陔餘叢考』商務印書館（1957年）。

がこの記録でわかる。「昌黎聯句」や、「謝宣城有聯句七篇」、「陶淵明有聯句一篇」等の作品については、能勢朝次の「聯句と連歌」<sup>3</sup>に詳しい。ここでの「城南聯句」<sup>4</sup>とは、韓愈と孟郊によるもので、その冒頭は、

竹影金瑣碎	孟郊	泉音玉淙琤	韓愈
瑠璃翦木葉	愈	翡翠開園英	郊
流滑隨仄步	郊	搜尋得深行	愈
遙岑出寸碧	愈	遠目增雙明	郊

(下略 298 句)

とあり、「庚耕清」の韻を踏んでいる。各人が五言二句を連ねるのに、その一人の二句において対を取ることをしないで、前者の第二句と、自分の第一句とが対聯になるような行き方をしているのである。

この「城南聯句」については、和漢・漢和聯句のための韻書とされている『和訓押韻』（「十一韻」）の「松平本」と「龍門本」、「十二韻」の『韻字之書』と『韻字記』にも「城南聯句」の引用<sup>5</sup>が見られるので、韓愈の聯句<sup>6</sup>は当時和漢・漢和聯句の連衆に親しまれていたことが確実である。

また、『和訓押韻』（「十一韻」）の序文にも、

<sup>3</sup> 能勢朝次「聯句と連歌」（『能勢朝次著作集』思文閣 昭和 56 年〔1981〕）に詳しく述べられている。

<sup>4</sup> 庚耕清韻に、以下の用例が見られる。

「松平本」 扨 驚一城南、「龍門本」、扨 驚一、『韻字之書』扨 驚一城南聯句退之作、『韻字記』扨 驚一

城南聯句に、窟窮尚嗔視孟郊 箭出方驚扨韓愈

<sup>5</sup> 川瀬一馬『古活字之研究』（日本古書籍商協会 1967 年）68、69 頁に、

『新刊五百家註昌黎先生聯句集』2 卷 2 冊 永和 2 年（1376）陳孟榮刊。

『五百家註音辯昌黎先生文集』40 卷 宋魏仲舉編南北朝愈良甫刊。

と見え、韓愈の詩集・聯句などの「五山版」が刊行されていた。

<sup>6</sup> 韓退之の石鼎聯句のこと（久保天随訳註『韓退之全詩集』続国訳漢文大成 日本図書センター 1978 年）。



我朝にては日本武尊のにみはりつくばのことの葉にはじまり、人の國にしては弥明師服が龍頭蠅聲の晁聯よりぞおこりにける（下略）。

と述べられていて、「弥明師服か龍頭豕腹の晁聯」<sup>7</sup>の韓退之の聯句が中国の聯句のはじまりだとしている。

さて、第一句が和句で、第二句が漢句の場合を和漢聯句、逆に第一句が漢句で、第二句が和句の場合を漢和聯句と呼ぶ<sup>8</sup>。和漢聯句の場合には、脇句(漢句)の末字の韻を以って偶数句に押韻する(ただし、和句を除く)。例をあげて示してみよう。

**和漢聯句** 応永元年（1394年）12月後小松院御独吟<sup>9</sup>折

- 1 ちる雪の花にいとほぬ嵐哉
- 2 歳寒梅獨芳
- 3 北窓晨呵筆
- 4 南陌曉霑裳
- 5 霧薄き外山の月に旅だちて
- 6 秋かぜ遠く分る草むら

（下略）

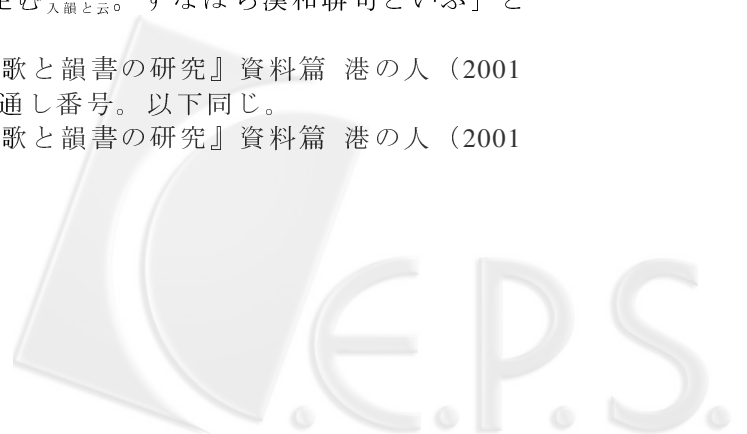
メッシュをかけている文字「芳」、「裳」は陽韻を踏む韻字となっている。

同じく、漢和の場合には、2・4・6 という偶数句は、漢句はいう

<sup>7</sup> 石坂正蔵『和訓押韻』（西日本国語国文学会翻刻双書 第一期 第4冊 下 昭和37年〔1962〕）の序文（「北岡本」）に「連歌を發句として漢を脇句とすこれを入韻といふ。すなはち一韻をさだめて、漢句ばかりにこれを押て、和漢聯句となづく。又漢句を破題として脇を和句にて韻字を定むおなじく入韻と云。すなはち漢和聯句といふ」とある。

<sup>8</sup> 大友信一監修 辜玉茹等編輯『聯句連歌と韻書の研究』資料篇 港の人（2001年）80頁。和漢・漢和聯句の番号は通し番号。以下同じ。

<sup>9</sup> 大友信一監修 辜玉茹等編輯『聯句連歌と韻書の研究』資料篇 港の人（2001年）に作品がある。



までもなく、和句であっても、その語を漢字に直した時に韻を踏まなければならない。

**漢和聯句** 文明 14 年（1482）3 月 26 日<sup>10</sup>

- |   |                      |        |
|---|----------------------|--------|
| 1 | 花濃 翻畫錦               | 勸修寺大納言 |
| 2 | 日かけもなかきあを柳の <b>絲</b> | 海住山大納言 |
| 3 | 春雨ははれても空やかすむらん       |        |
| 4 | わけいる山に夕かせそ <b>吹</b>  | 勸修寺中納言 |
| 5 | 嶮路驢猶澁                | 宗山     |
| 6 | 幽栖鶴日 <b>随</b>        | 姉小路宰相  |

（下略）

メッシュをかけている文字「絲」、「吹」、「随」は支韻を踏んでいる韻字である。この和漢・漢和聯句の例では一韻到底の形式になっているが、途中で韻を変えたりするものも見られる<sup>11</sup>。

和漢・漢和聯句の変遷については、次の四期に区分できる。

**第一期、草創期**（平安〔794-1192〕中期から鎌倉〔1192-1333〕末期まで）

和漢聯句の韻字については、『王沢不渴鈔』（建治年間〔1275～1278年〕の成立）<sup>12</sup>に、

近来連句連歌、優客好人翫<sub>レ</sub>之ヲ。無<sub>レ</sub>別ノ子細<sub>一</sub>。連句ニ付<sub>レ</sub>連歌<sub>ヲ</sub>、連歌ニ付<sub>レ</sub>連句<sub>ヲ</sub>。韻字賦物等如<sub>レ</sub>常ノ。付事ハ必<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>定<sub>一</sub>句数<sub>ヲ</sub>随<sub>レ</sub>出来<sub>レ</sub>矣。

とあって、連句連歌(和漢・漢和聯句)はこのころから遠くない時期に流行しはじめたことを物語っている。

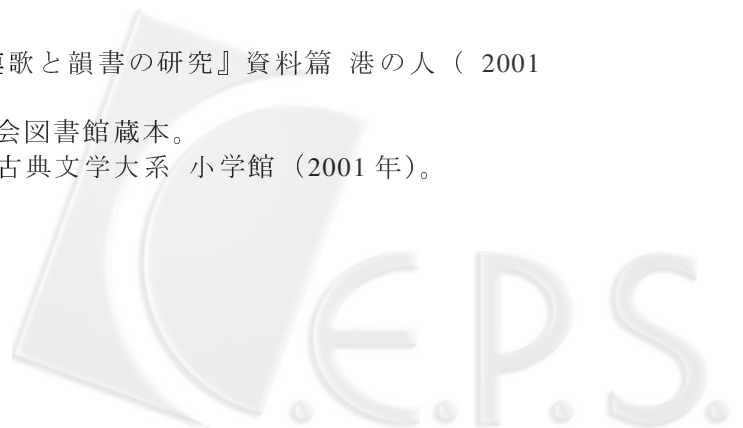
そして、『菟玖波集』（延文 1 年〔1356〕）<sup>13</sup>に「關白前左大臣良基

<sup>10</sup> 注 9 と同じ。

<sup>11</sup> 大友信一監修 辜玉茹等編輯『聯句連歌と韻書の研究』資料篇 港の人（2001年）に作品がある。

<sup>12</sup> 『王沢不渴鈔』寛永 11 年（1634）国会図書館蔵本。

<sup>13</sup> 金子金治郎校注・訳『連歌集』新編古典文学大系 小学館（2001年）。



千本の花見侍るとて、和漢の連句に、客心雨滴愁／とまれかし草の庵のけふのくれ」（巻 19 雜體）の 2 句の作品が見られる。

この頃の作品は、和漢、漢和聯句の区別や押韻などについてはまだ整えられていないと見られる時期であった。

## 第二期、盛況期（鎌倉〔1192-1333〕末期から江戸〔1602-1868〕時代初期）

五山文学は、鎌倉時代の後期から室町時代を通じて五山の禅林を中心として禅僧の間に作られた。ここで活躍した義堂周信の『空華日用工夫略集』（康暦 3 年〔1381〕11 月 2 日）<sup>14</sup>に、

凡そ吾が国俗の旧例として、和漢聯句の漢に韻有れど和には韻無し。今即ち新に此を立て和も亦押韻す。

と述べている。和漢聯句は脇の漢句以下偶数句の漢句には韻字を用い、和句には適用しない。漢和聯句は脇句(入韻句と呼ぶ)の和句に韻字を読み入れ、以下和句・漢句を選ばず同一韻を隔句に読み入れ、漢句・和句にも押韻するという。つまり、漢和聯句はこの時期から押韻することとなった。

また、義堂周信の『空華日用工夫略集』（至徳元年〔1384〕11 月晦日）に、

府君臨駕、余且迎接。君曰好山水。引上梅亭、迺君所書南枝二字、新掲南軒。(略)官伴攝政等三五輩、僧伴普明國師・性海・太清等十餘人、點心罷復會於南枝、倭漢聯句一百句。

とあって、次の 9 句が掲載されている。

カスヤ千代名モ玉松ノ霰カナ

二条良基

<sup>14</sup> 蔭木英雄『訓注空華日用工夫略集』思文閣（1982 年）327 頁。



歳晚喜回春	義堂周信
チル比ノ花ヤ山チヲカクスラン	足利義満
鞋香草欲匂	義堂周信
雪ノアユミハアトモシラレス	二条良基
ケサミツル花ハムカシニチリナシテ	足利義満
春遊跡易陳	春屋妙葩
秋ノ田ノミツホノ国モヲサマリテ	二条良基
晁旒拜紫宸	太清宗渭

これは、「真韻」の韻目を押韻している。このように、連衆は五山の詩僧と公家・連歌師などで、彼らの文芸的交流の媒体として盛行したことを伺わせる。

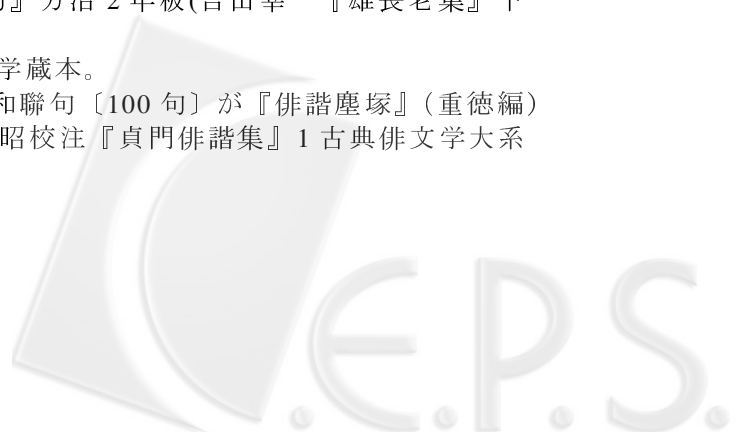
『連歌総目録』<sup>15</sup>によると、和漢・漢和聯句の作品は正慶元年（1332）から慶長5年（1600）まで、和漢聯句は218件、漢和聯句は31件があげられている。これらの作品からわかることは、和漢・漢和聯句が公家・武家・禅僧の三社会を中心として行われていたことである。特に、『和訓押韻』の作者と擬せられている三条西実隆のほか、里村紹巴、幽斎玄旨、後陽成院、中院通勝等の作品が多く残されている。さらに、彼らの作品集は、『和漢・漢和中院素然・永雄両吟千句』（万治2年〔1659〕板）<sup>16</sup>、『石鼎集』（貞享〔1684-1687〕頃板）<sup>17</sup>、『俳諧塵塚』（寛文12年〔1672〕）<sup>18</sup>などは江戸期になってからも編集され、刊行されていた。

<sup>15</sup> 『連歌総目録』明治書院1997年。

<sup>16</sup> 『和漢・漢和中院素然・永雄両吟千句』万治2年板(吉田幸一『雄長老集』下巻 古典文庫 1997年)に収録。

<sup>17</sup> 『石鼎集』貞享(1684)頃板 東京大学蔵本。

<sup>18</sup> 玄旨、紹巴、玄圃、英甫等による漢和聯句〔100句〕が『俳諧塵塚』（重徳編）に収録されている。(中村俊定・森川昭校注『貞門俳諧集』1 古典俳文学大系一 集英社 1971年)。



### 第三期、轉換期（江戸〔1602-1868〕前期）

江戸初期に従来の和漢・漢和聯句は一部の堂上派の連衆に詠まれていたが、狂詩・俳諧の勃興に伴って漢和俳諧に変容してきた。まず、寛永9年〔1632〕成立の『徳元千句』<sup>19</sup>に三江と徳元との「漢和之俳諧」が見られる。

漢和之俳諧

寒-月^誰カ氷-餅ソ	三江
雪を粉にしてちらす山風	徳元
鳴神や石うすを引音ならん	徳元
小-歌^頓-土 礮	三江

（下略）

此俳諧は伊豆國熱海在湯中のつれつれに異なる興にもやと百韻ことの名をかへ(中略)又追加漢和の狂句は折節洛陽建仁寺より益長老東關下向ましまして不慮に參會則章句を申請両吟につらねならへ侍るは知識の金言をけかし侍る事嘲哂をまねくものか。

寛永九曆仲冬日至

齋藤齋宮頭入道

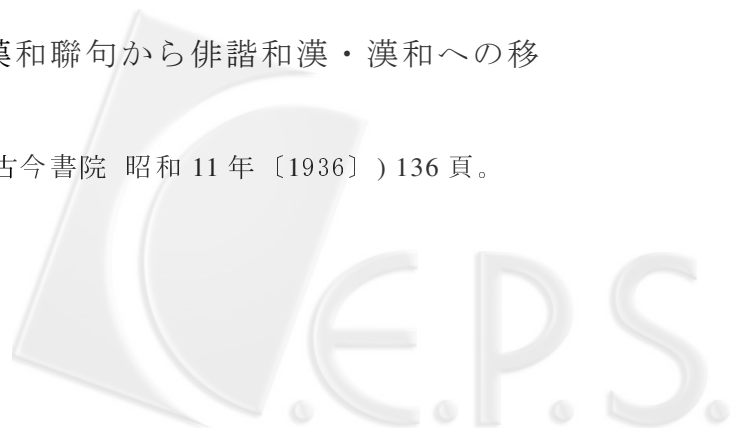
徳元 在判

とある。この「漢和之俳諧」は「東」の韻を踏んでいる。また、笹野堅が『徳元千句』の解説に、

中世に於ける和歌、連歌、俳諧の推移に見ても、民衆との距離が遠く、連歌は俳諧よりも民衆との距離が近くはなかつた。中世に盛んであつた連歌が最も中世的な表徴であつたとすれば、中世に始つた俳諧は寧ろ近世の嗜好を表示したものであらう。

と述べている。ここで、和漢・漢和聯句から俳諧和漢・漢和への移

<sup>19</sup>『徳元千句』（笹野堅『齋藤徳元集』古今書院 昭和11年〔1936〕）136頁。





行も連歌から俳諧への移行も同じ系列のものと考えていいだろう。

また、忍やまの山人の『牛刀每公編』（寛文12年〔1672〕）の自序<sup>20</sup>に、

俳諧漢和十二韻獨リ詠之ヲ以テ伸寸心ヲ。忝クモ願フ拜上於菅  
社ニ者ノ有ル年矣。

とあるように、忍やまの山人による十二の韻目順〔東・支脂之・虞模・真諄臻・元魂痕・寒桓・先仙・蕭宵・麻・陽唐・庚耕清・尤侯幽〕に俳諧の和漢・漢和押韻の独吟俳諧百韻の連作(付録に冬韻と灰韻の韻字俳諧各100句が載っている)が見られる。

尾形仿の『俳諧史論考』の「和漢俳諧史年表」<sup>21</sup>によれば、寛永9年(1632)から元禄11年(1698)までに約50件の俳諧漢和・和漢の作品とそれに関する記事が見られる。また、和漢・漢和聯句の作品集としては、『和漢漢和中院素然・永雄両吟千句』(万治2年〔1659〕)、『石鼎集』(貞享〔1684~1688〕頃)等もこの時期に刊行された。江戸時代になってから、和漢・漢和聯句を詠む連衆は、和漢・漢和聯句の連衆だけではなく、俳諧の連衆も和漢・漢和聯句を詠んでいた。さらに、俳諧漢和・和漢までに進展していたことは確実である。

#### 第四期、衰退期（江戸〔1602-1868〕中期）

宝永年間以後に現存する俳諧漢和・和漢の作品は六林の『峨洋篇』(明和3年〔1766〕)、素兆の『俳諧漢和燈下吟』(安永3年〔1774〕)等<sup>22</sup>が見られるが、『俳諧漢和燈下吟』に、

松とりていまだ間もなき門を叩て訪ひ来るは、俚玉庵の主なり。(中略)。

蕉門の風雅あまねく世に翫べども、漢和を唱る者は、百にして一つにも

足らず。廢れるに近きを嘆き、是を勧めて起さむと思ふにあり。(下略)

とあり、俳諧漢和を詠む人は「百にして一つにも足らず」と言う寂

<sup>20</sup> 忍やまの山人『牛刀每公編』(国文学研究資料館 マイクロフィルム版)。

<sup>21</sup> 尾形仿『俳諧史論考』桜楓社 昭和52年(1977)183~185頁。

<sup>22</sup> 『名古屋叢書三編』第18巻1(名古屋市蓬左文庫編 1985年)343頁。

しさであるという。

また、蝙蝠庵散人が『俳諧漢和手引草』の後序（明和2年〔1765〕）<sup>23</sup>に、

此小冊、濃陽に遊ぶ日、ある古院の蔵書より求得たる儘写し畢。ひそかにおもふに、漢和のもて遊び六七十年來は一向にすたれたる也。貞享元禄の頃より享保の中比までも、風雅の世話をやく人もしばらくおいて論ぜずやありけん。

と述べられている。後序の「漢和のもて遊び六七十年來は一向にすたれたる也」という文脈から、元禄末期以後は、一般俳壇の衰頹と共に和漢・漢和も自然に廢れていったことがわかる。

更に、『翁草』<sup>24</sup>の「享保年間洛俳諧の噂」（卷百五）に次のような記事が載っている。

漢和の俳諧は、近世にては真珠庵如泉を世に賞せり。如泉没して後は、四時堂其諺を賞す。晩山知石など次之。其點者に寄ては漢和の點斷云ふも多し。

とあり、近世のこの時期における和漢・漢和俳諧の諸相がこの記事で明らかになっている。

## 二、和漢・漢和聯句の式目について

式目は法式の箇条書き、和漢・漢和聯句の式目は連歌・俳諧を吟ずるため守るべき禁制・故実をさす。応安5年（1372）二条良基が『応安新式』を定めて、連歌法度を全国的に制定統一した。前述したように、中世期に流行し始めた和漢・漢和聯句の式目は、一条兼良の『連歌初学抄』（享徳元年〔1452〕）の「賦物篇」「式目篇」「和漢篇」の三部の中の「和漢篇」である。

<sup>23</sup> 同前注。

<sup>24</sup> 神沢杜口『翁草』（4）日本隨筆大成 第3期22卷 吉川弘文館 平成8年（1996年）。



和漢篇<sup>25</sup>

- 一 大概法、可用連歌式目事
- 一 和漢共以五句為限、但至漢對句可及六句事
- 一 景物草木等員數、和漢可通用事、但雨、嵐、昔、古曉、老等之類、各可用之（下略）

關白一条兼良御判

この七条の「和漢篇」は、近世に出版された和漢・漢和聯句のための韻書、『和訓押韻』（『十一韻』）の付録にも付けられているので、多くの規範になったと考えられる。

また、和漢・漢和聯句の盛況期にこの作法（式目）整えたのは徳大寺実淳の『漢和法式』（1498年）<sup>26</sup>である。

- 一 端作漢和聯句ト四字ニ書也。
- 一 第唱句出來ノ時、其内ノ平字、其韻ノ字ヲ除テ、入韻ノ字ヲ定ル也（中略）

明応七曆三月下旬

槐下散班

近世期になると、堂上派に対して地下派の勢いが進展して、連歌から俳諧へ移り、和漢・漢和聯句も俳諧漢和・和漢へと変化していった。そのために、俳諧漢和・和漢に対応する式目が次々と編纂され刊行された。野々口立圃が『はなひ草』（寛永13年〔1636〕）<sup>27</sup>に「和漢篇」を加えている。

## 和漢篇

- 一 大概可<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>俳諧之法<sub>一</sub>事。
- 一 和漢共以<sub>二</sub>五句<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>限。但至<sub>二</sub>漢對<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>六句<sub>一</sub>事。

<sup>25</sup> 岡見正雄校『良基連歌論集』古典文庫 第63冊（昭和27年〔1952〕）。

<sup>26</sup> 『續群書類従』第十七輯上 続群書類従完成会 昭和32年（1957）。

<sup>27</sup> 小高敏郎等校注『貞門俳諧集』2（古典俳文学大系二 集英社 昭和47年〔1972〕）。

(中略)

まず、俳諧の最初の式目書が一介の町人である立圃によって編纂されたことが特筆される。また、重頼の『毛吹草』(自序は寛永 15 年〔1645〕)に、

- 一 俳諧の指合は、昔より和漢の法に用之。當代に至りても大方同じ。但其席に依べし。
- 一 十句の内、禁制之物連歌に同。

(下略)

と述べられている。そして、寛永 18 年 (1641) に 斎藤徳元の『俳諧初学抄』は、庶民向けというよりも、「君命」によったもので、和漢連歌の方式に準じて、俳諧の方式を定めている。また、松永貞徳の『俳諧御傘』に収める有名な式目歌に「俳諧は式目ぞなき大方は和漢の如く去り嫌ふべし」<sup>28</sup>とあり、俳諧の式目が「和漢の法」を適用していたことから、初期(貞門期)俳諧の連衆は俳諧、俳諧漢和・和漢等を詠むということが自然の流れだったと推定できる。

### 三、聯句連歌の表現と韻書の成立

和漢聯句・漢和聯句は聯句と連歌を結合させた言語遊戯である。『詩経』の昔から、中国の詩は必ず韻を踏み、概ね句の末尾に韻を踏む。「脚韻」は詩歌の句末が同じ韻に備えてあることも「押韻」というのである。韻とは、音の響きの意である。つまり、同じ音の響きを、一定の位置に置くことによって、耳にこころよいという効果を生ずるのである。

連歌は 5・7・5 の発句に 7・7 の脇句を付け、それに 5・7・5 の第 3 句を付けるというふうにして、5・7・5 と 7・7 の句を交互に連ねて、最後の挙句に至る。連歌は末尾に「脚韻」を踏むことはなく、

<sup>28</sup> 赤羽学『校注俳諧御傘』(福武書店 昭和 55 年〔1980〕) 解説の 8 頁。

一句ごとに句境を展開させてゆくことが肝心なことである。

和漢・漢和聯句を詠む時、聯句と連歌とが融合するために、義堂周信は『空華日用工夫略集』（康暦3年〔1381〕11月2日）に、

凡そ吾が国俗の旧例として、和漢聯句の漢に韻有れど和には韻無し。今即ち新に  
此を立て和も亦押韻す

と述べている。つまり、漢和聯句を詠む時には、漢句も和句も押韻する必要があるというのである。

中世期にどんな辞書が利用されていたかについて、大曾根章介<sup>29</sup>が、

鎌倉時代における詩会の盛行は、貴族が作詩の能力と広範な知識を有していたことを示すとも言えるが、そのために当代には種々の作詩指南書や、故事金言集が著されている。幼童の作詩参考書としては菅原為長の『文鳳抄』が最もよく知られる。

と述べているように、『文鳳抄』が当時、公家の連衆に作詩の参考書としては最も一般的な韻書として使われていた。そして、五山文学の発展に伴って禅僧たちが当時よく使用していた韻書と類書については、大庭脩の「僧侶と漢籍」<sup>30</sup>に、

『礼部韻略』『古今韻会举要』『韻府群玉』『氏族排韻』などが代表的な韻書で、それらの中国版が渡来するだけでなく、五山版<sup>31</sup>の中にこれらが含まれ日本で印行されていることは、いかに需要がたかかったかを示している。また、虎関師鍊によって『聚分韻略』という韻書が作られ、南北

<sup>29</sup> 「和漢兼作の人々と唱導の大家」（大曾根章介『日本漢文学論集』第1巻 汲古書院 平成10年）172頁。

<sup>30</sup> 大庭脩「僧侶と漢籍」（『漢籍輸入の文化史』研文出版 1997年）84頁。

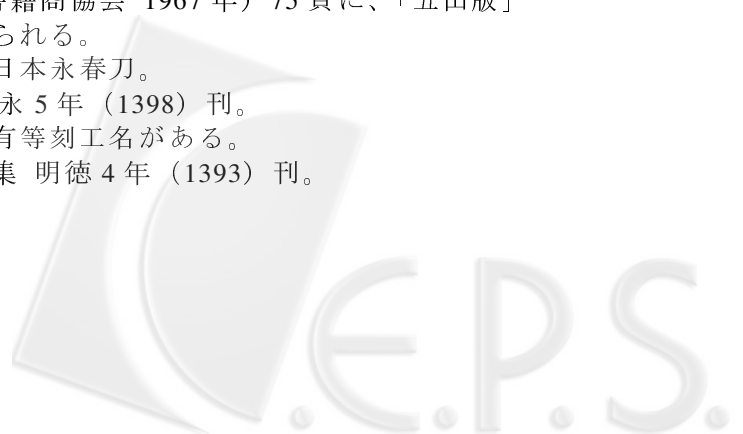
<sup>31</sup> 川瀬一馬『古活字之研究』（日本古書籍商協会 1967年）75頁に、「五山版」について、以下のような字書類が見られる。

『増補互註禮部韻略』南北朝刊。日本永春刀。

『古今韻会举要』三十卷 10冊 応永5年（1398）刊。

『韻府群玉』南北朝刊。彦明・長有等刻工名がある。

『新編排韻増廣事類氏族大全』十集 明德4年（1393）刊。



朝から室町時代にかけて十二種類の版本が出た。

と述べられている。中国の韻書、類書に関しては、中世期に様々な辞書が日本に入ってきたことがわかる。また、虎関師錬は『聚分韻略』を編纂し、刊行した。これらの利用については、『空華日用工夫略集』、『実隆公記』、『宣胤卿記』、『鹿苑日録』、『言継卿記』などの日記類から、室町時代後期から江戸時代初期の間には、『聚分韻略』、『広韻』、『洪武正韻』、『韻府群玉』、『古今韻会举要』、『韻会小補』などの韻書・類書が公家・武家・禅僧の三社会で使用されていたことが明らかである。

江戸期に入ると、出版物の発達、町人文学の台頭などと社会環境が変化してきたこととあいまって、『聚分韻略』に基いて和漢・漢和聯句のための韻書『十一韻』〔『和訓押韻』〕、『漢和三五韻』、『和語畧韻』等の版本が刊行されるようになった。

『漢和三五韻』<sup>32</sup>の序文に、

此三五韻は、宇都宮氏由的の述る處なり。そのかみ後常<sup>37</sup>恩寺殿のぬき出給ひし和訓押韻に、誰の人か元韻を加て十二韻といひて、世に行はれ侍る。今又冬灰歌の三の韻をそへしは、和漢に用べき文字共おほくて、麻元などにおさおさおとるまじきによりてなん。さきの十一韻いつの程よりか梓にちりばむる時、烏焉の誤有にや、入韻の字より始おぼつかなき事多く、入べき文字もれたるたぐひ有を、是かれ韻書共たゞし合せてことなりぬ（下略）。

とあり、これによると、最初に作られたのが十一の韻目からなる十一韻である。それに、あらたに「元痕魂」が加えられ、十二韻が作られた。さらに、十五韻で「冬・灰・歌」が増えている。三十一韻は「江・微・魚・齊・佳皆・文欣・刪山・肴・豪・青・蒸登・侵・覃談・鹽添・咸銜・巖凡」が加わった。以下の1～4の韻書はいずれ

<sup>32</sup> 『漢和三五韻』(静嘉堂マイクロフィルム版)。



も『聚分韻略』に基いて成立したものである。

1. 十一韻 『和訓押韻』（「北岡本」<sup>33</sup>、「松平本」<sup>34</sup>、「龍門本」<sup>35</sup>）
2. 十二韻 『韻字之書』<sup>36</sup>、『韻字記』、『増補倭訓押韻』<sup>37</sup>
3. 十五韻 『漢和三五韻』（宇都宮由的撰）<sup>38</sup>
4. 三十一韻 『和語略韻』（松峯散人撰）<sup>39</sup>

まず、『和訓押韻』の成立と利用については、深沢真二氏の「『和訓押韻』考」<sup>40</sup>に詳しい。深沢氏は、断片的な付合の抄出ではなく、一卷がまとまって今日まで伝わる漢和聯句のうち最も古いものは、『空華日用工夫略集』の記事から百年余り経過した、次の□を取りあげ、

- ① 文明 14 年（1482）3 月 26 日、漢和百句（支韻）

次いで、十六世紀前半の実作の資料としては、次の 3 件の漢和聯句が伝存するのみで、

- ② 永正 15 年（1518）の成立か、漢和百句（陽韻）  
 ③ 享祿年間（1528～1532）の成立か、漢和百句（支韻）  
 ④ 天文 19 年（1550）4 月 28 日、漢和百句（支韻）

この 4 件のうち、「②永正 15 年の成立か、漢和百句（陽韻）」を除いて、3 件が同じく「支韻」を用いているために、『和訓押韻』の写本「松平本」、「北岡本」、及び「版本」（正保 2 年〔1645〕）の韻字、熟語等を比較し、その結果を次のように述べられている。

<sup>33</sup> 「北岡本」（熊本大学永青文庫蔵、写本 1 冊、天正 20 年〔1592〕書写の識語がある）。

<sup>34</sup> 「松平本」（島原図書館松平文庫蔵、写本 1 冊識語ナシ）。

<sup>35</sup> 「龍門本」（龍門文庫蔵、写本 1 冊、識語ナシ）。

<sup>36</sup> 『韻字之書』2 冊（宮内庁書陵部蔵本）。

<sup>37</sup> 叡山文庫蔵『韻字記』（駒沢国文 第 16 号 昭和 49 年 11 月）。

『増補倭訓押韻』3 冊（聖護院蔵本）。

<sup>38</sup> 『漢和三五韻』（貞享 3 年〔1686〕刊）宇都宮遯庵によって編纂された。

<sup>39</sup> 『和語略韻』（元禄 11 年〔1698〕刊）松峯散人序。

<sup>40</sup> 深沢真二「『和訓押韻』考」（『国語国文』65 卷 第 5 号 1996 年 5 月）。

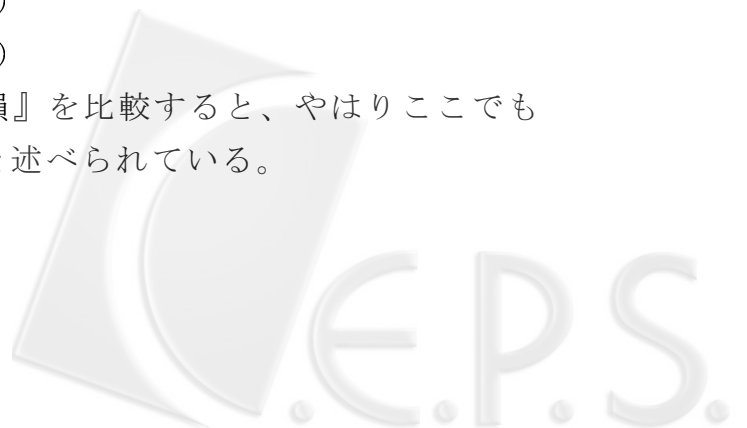
3 件の漢和聯句でのべ 70 箇所には和句による押韻があるが、3 件ともに用いられた韻字は吹・漪・芝・為・卑・遺・衰・之の 8 種にも及ぶ。3 件のうちに 2 件に共通する韻字は枝・遅・籬・知・悲・誰・颯・池・移の 9 種、他に 28 種の韻字が用いられていた。(中略)。とくに、熟語の用例が共通して見られるのは偶然とは思わない。①③④はいずれも禁裡御会であったが、時間的に大きく隔たり連衆は相当に異なっている。それにもかかわらず特定の字種や熟語に用例が集中した理由は、和訓に適した韻字を抜き書きして熟語の例も添えた、簡便な韻字の集が連衆の間に継承されていたためと考えられる。

ここで、深沢真二氏は 1482 年から 1550 年までに、漢和聯句の簡便な韻書がこの時期に成立したかと推測しておられる。

また、深沢真二氏が指摘しておられるこの 3 件の漢和に共通用いられていた八種の韻字を、『和訓押韻』の三本(「松平本」、「北岡本」、「版本」)に照らして見たところ、「松平本」の注記に一致し、さらに、深沢真二氏は、前述した①から④の作品のほかに、以下の九つの作品を加えて、

- ⑤ 弘治 2 年 (1556) 8 月 21 日、千句第三、漢和百句 (陽韻)
- ⑥ 同日、千句第五、漢和百句 (支韻)
- ⑦ 同 23 日、千句第九、漢和百句 (庚韻)
- ⑧ 永祿 12 年 (1569) 5 月 23 日、漢和百句 (支韻)
- ⑨ 成立年時未詳、策彦・紹巴両吟和漢千句第一、漢和百句 (支韻)
- ⑩ 同千句第三、漢和百句 (先韻)
- ⑪ 同千句第五、漢和百句 (庚韻)
- ⑫ 同千句第七、漢和百句 (尤韻)
- ⑬ 同千句第九、漢和百句 (陽韻)

これらの作品を三本の『和訓押韻』を比較すると、やはりここでも松平本が最も押韻の実例に近いと述べられている。





さらに、『和訓押韻』（「松平本」）は「北岡本」（天正 20 年（1592））より、以前に成立したと推測している。ここで、深沢真二氏の研究を踏まえながら、先に、『聯句連歌と韻書の研究 資料篇』で次の 12 件を中心に、韻字の調査をしたが、その結果を以下に記す。

- (一) 文明 14 年 3 月 26 日成立（1482）漢和聯句〔支韻<sub>上平</sub>〕  
押韻している韻字「絲・吹・漪・思・脂・施…」
- (二) 天文 19 年 4 月 28 日成立（1550）漢和聯句〔支韻<sub>上平</sub>〕  
押韻している韻字「垂・漪・遅・移・時・居…」
- (三) 天文 24 年 3 月 25 日成立「千句」第一（1555）漢和聯句〔屋韻<sub>入聲</sub>〕  
押韻している韻字「木・宿・舳・竹・麓・睦…」
- (四) 天文 24 年 3 月 27 日成立「千句」第七（1555）漢和聯句〔真韻<sub>去聲</sub>〕  
押韻している韻字「視・灑・靡・巳・使・地…」
- (五) 策彦 紹巴両吟『千句』第一（1558～1569）漢和聯句〔支韻<sub>上平</sub>〕  
押韻している韻字「吹・奇・時・差・之・遅…」
- (六) 永禄頃漢和千句策彦 紹巴両吟 第三（1558～1569）漢和聯句〔先韻<sub>下平</sub>〕  
押韻している韻字「年・天・舩・湍・傳・邊…」
- (七) 永禄頃漢和千句策彦 紹巴両吟 第五（1558～1569）漢和聯句〔庚韻<sub>下平</sub>〕  
押韻している韻字「桜・明・声・横・晴・繫…」
- (八) 永禄 12 年 5 月 23 日成立漢和（百句）両吟（1569）漢和聯句〔支韻<sub>上平</sub>〕  
押韻している韻字「吹・時・移・絲・滋・遅…」
- (九) 天正 4 年 3 月 3 日成立（1576）漢和聯句〔庚韻<sub>下平</sub>〕  
押韻している韻字「傾・鳴・行…」
- (十) 元和 8 年 12 月 7 日成立（1622）漢和聯句〔庚韻<sub>下平</sub>〕  
押韻している韻字「声・晴・榮・鶯・傾・争…」
- (十一) 寛永 12 年 6 月 3 日成立（1635）漢和聯句〔尤韻<sub>下平</sub>〕  
押韻している韻字「楼・幽・秋・菽・舟・調…」
- (十二) 寛文 13 年 3 月 26 日成立（1637）漢和聯句〔真韻<sub>上平</sub>〕  
押韻している韻字「春・人・鱗・麟・民・旬…」

以上を『和訓押韻』（「十一韻」）の韻字と比較すると、「松平本」には見られない韻字が増えていることがわかる。(一)の第 14 句「施」、56 句「炊」、94 句「犁」三箇所と(二)の第 46 句「飢」、72 句「惟」、

86 句「炊」、96 句「瀉」は「松平本」には見られない韻字である。

(三)、(四)のように天文 24 年に至ると、漢和聯句もますます盛んとなり、本来の平声のみで済ませるのでは面白さが少なく感じられたのであろう。平声をわざと用いず、仄声の文字のみを用いて句を作るような言語遊戯としてはより高度なものが現れてくるのである。次の(三)、(四)の天文 24 年(1555)漢和聯句は、全て仄声の韻字ばかりである。

深沢真二氏は、『和訓押韻』の韻字に「松平本」の「熟語の特殊な訓読」「単字の訓を含み込むような熟語の例」の方が一致しているとして、「松平本」は「北岡本」より早く成立したもの<sup>41</sup>と述べているが、『和訓押韻』の出典について、注文の「熟語」の用例は『河海抄』から抄出したものと考えられるため、深沢氏の説は必ずしも当たらないと思われる。当時、『河海抄』のような書物は一般的に読まれていたものと推定できるからである。

---

<sup>41</sup> 注 40 と同じ。



〔表一〕十一韻、十二韻、十五韻各韻目の韻字数の対照表

件数	韻目	韻字数	十一韻			十二韻		十五韻	聚分
			松	北	龍	書	記	三五韻	
(一)	支韻 <sub>上平</sub>	49	42	44	43	48	48	48	
(二)	支韻 <sub>上平</sub>	50	42	45	44	48	48	50	
(三)	屋韻 <sub>入聲</sub>	49	×	×	×	×	×	×	49
(四)	寘韻 <sub>去聲</sub>	47	×	×	×	×	×	×	47
(五)	支韻 <sub>上平</sub>	50	42	44	44	44	44	49	
(六)	先韻 <sub>下平</sub>	50	39	40	39	48	47	50	
(七)	庚韻 <sub>下平</sub>	46	38	38	38	44	44	46	
(八)	支韻 <sub>上平</sub>	50	43	45	43	45	44	49	
(九)	庚韻 <sub>下平</sub>	3	3	3	3	3	3	3	
(十)	庚韻 <sub>下平</sub>	48	39	41	41	44	44	48	
(十一)	尤韻 <sub>下平</sub>	50	38	38	39	43	45	50	
(十二)	真韻 <sub>上平</sub>	48	30	34	36	46	46	46	

注：「件数」は前述の(一)～(十二)件。

「韻目」はそれぞれの漢和聯句についての韻目(押韻)である。

「韻字数」は100句の中に押韻している数。

「十一韻」、「十二韻」、「十五韻」、「聚分韻略」は韻書にどのぐらい載っているかの数である。

「(九)」の漢和聯句は8句しか詠まれていない。

### (三) 天文24年3月25日(1555)成立「千句」

#### 第三漢和聯句〔屋韻<sub>入聲</sub>〕

- |   |                  |    |
|---|------------------|----|
| 1 | 鞭蹇在尋花            | 入右 |
| 2 | 雲こそうつめ峯の桜木       | 覚恕 |
| 3 | かすみよりうつろふ月のくれそめて | 御製 |
| 4 | 林遙難借宿            | 入宮 |

(下略)

### (四) 天文24年3月27日(1555)成立「千句」

#### 第七漢和聯句〔寘韻<sub>去聲</sub>〕

- |   |                |    |
|---|----------------|----|
| 1 | 花獻御爐香          | 長雅 |
| 2 | かすみを月のかりとそ視    | 中大 |
| 3 | 星もまたのこる朝あけ長閑にて | 四大 |
| 4 | かたへの山路雨灑らし     | 冷中 |



(下略)

漢和聯句が本格的に行われ出したのは応仁の乱後の文明期であるが、早くも天文 24 年には仄声のみのものが詠まれている。これは天皇と覚怒という禅僧と公家衆とが連衆に加わって詠んでいる。注目すべきは五山衆が漢句ばかりでなく、和句も詠んだことである。また、天皇も公家衆も漢句を詠み、韻脚字の押韻を規定通りに行っている。平声で押韻するだけでも困難が伴うのに、さらに難しい仄声で百句一巻が成り立っている。これは言語遊戯としては相当に高度な営みで、通常行われているよりは、更に進展したものであった。

(五) は禅僧策彦周良と連歌師里村紹巴との両吟千句で、第一は上平の支韻である。漢和聯句は支韻のものがもっとも多い。「北岡本」と「松平本」とを比較すると、「松平本」で韻字が不足するのは第 20 句「琵」(多情彈要琵)、26 句「支」(要津州九支)、36 句「帽」(雲片掩峨帽)、60 句「滋」(左々すむすむ袖のつゆは滋)、78 句「訾」(離變難免訾)、88 句「緇」(許由禁耳緇)の六箇所である。同じく「北岡本」で検索すると第 16 句「涯」(故郷天一涯)、20 句「琵」(多情彈要琵)、36 句「帽」(雲片掩峨帽)、78 句「訾」(離變難免訾)、90 句「来」(ふけて礁の又ひ々き来<sup>ス</sup>)の 5 箇所であり、「松平本」より「北岡本」の方が、韻字が多い分だけ適合する頻度が高いのである。

(六) の策彦・紹巴「両吟千句」の第三は下平の先韻であるが、これも(五)と同断である。(七)の策彦・紹巴「両吟千句」の第五もほぼ(五)、(六)の 2 例と同じような傾向にあるが、これは下平の庚韻であり、「北岡本」より「松平本」の方が適合度が高い。すなわち、第 12 句「檠」(燈殘一短檠)、36「嶸」(かけはしけみの山の崢嶸<sup>サ</sup>)句の二箇所、「松平本」にはあるが、「北岡本」には存しない。その逆の例は第 24 句「旌」(一釣換三旌)が「北岡本」にあり、「松

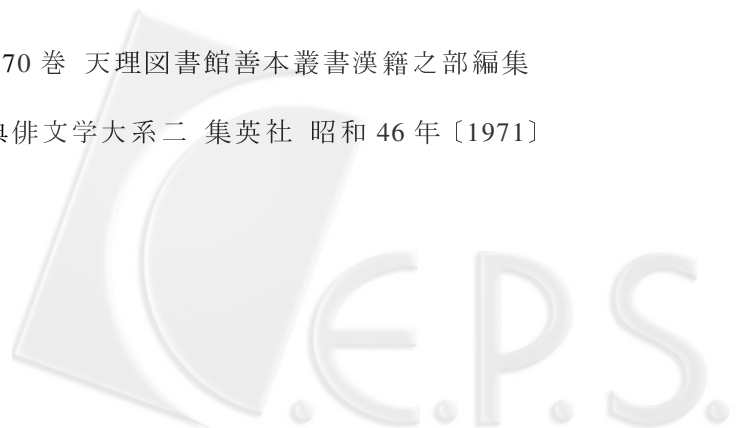
平本」にない。〔表一〕のように（五）、（六）、（七）（八）、（十）、（十二）の6件を見ても「松平本」の韻字数がやや不足している。

義堂周信の『空華日用工夫略集』や『実隆公記』の記事により、義堂の時代に既に漢和聯句が行われていたことがわかるが、われわれが実際に確認し得るのは、『連歌総目録』によると、文明期に入ってからのもので、「文明14年（1482）の漢和百句」が比較的早いものである。成立件数の上で漢和聯句が和漢聯句を凌ぐに至るのは、天正末期から正保頃にかけてのことである。この時期に『和訓押韻』の「北岡本」ができ、続いて「松平本」、「龍門本」が現れている。この漢和聯句の室町時代後期から江戸時代初期の間には、『実隆公記』の記事によっても知られる通り、公家・武家・禅僧の三社会が融合するに従い、この五山衆・武家衆の交流の道具として聯句連歌が大きな役割を果たした。これが後期五山文芸の代表的なものとなった。

貞享3年（1686）に刊行した『漢和三五韻』の作者の宇都宮由的が、伊藤仁斎の漢和聯句会に出席していたことは、『仁斎日記』<sup>42</sup>に載っているし、寛文六年（1666）に、宇都宮由的が西村良庵「漢和百韻」に維舟（重頼）と共に点を加えた一卷は、『時勢粧』<sup>43</sup>に見られる。宇都宮由的が和漢・漢和聯句会にも出席し、俳諧漢和・和漢の俳諧連衆の仲間でもあることがわかる。「十一韻」（『和訓押韻』）、「十五韻」（『漢和三五韻』）、「三十一韻」（『和語畧韻』）の韻書は近世初期に和漢・漢和聯句のための韻書だけではなく、俳諧の連衆にも使用されていたことが確実である。

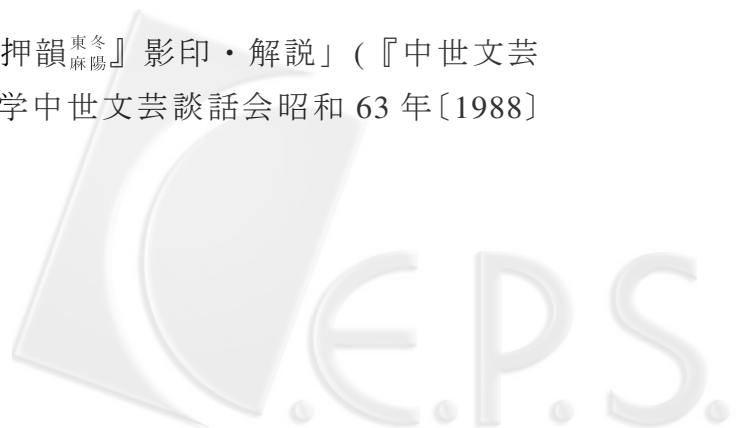
<sup>42</sup> 『天理図書館善本叢書』和書之部 第70巻 天理図書館善本叢書漢籍之部編集委員会編集 八木書店(1985年)。

<sup>43</sup> 小高敏郎等校注『貞門俳諧集』2 古典俳文学大系二 集英社 昭和46年〔1971〕に収録。



## 参考文献

1. 石坂正蔵 『和訓押韻』（西日本国語国文学会翻刻双書 第一期 第四冊下 1962年）
2. 大友信一 「韻書の系譜」（『岡山大学法文学部学術紀要』39号 1978年12月）
3. 大友信一 『聯句連歌と韻書の研究』資料篇 港の人 2001年
4. 蔭木英雄 『訓注空華日用工夫略集』思文閣 1982年
5. 鍛冶光雄 「石鼎集の内容と伝本」（『連歌研究の展開』勉誠社 昭和60年〔1985〕）
6. 川瀬一馬 『増訂古辞書の研究』雄松堂 1986年
7. 川瀬一馬 『五山版の研究』日本古書籍商協会 1970年
8. 国米秀明 「漢和聯句・和漢聯句について」（『国文学論叢』30輯（龍谷大学国文学会 昭和60年3月〔1985〕）
9. 小高敏郎 『近世初期文壇の研究』明治書院 昭和39年（1964）
10. 住吉朋彦 「〔元〕刊本系『古今韻会举要』伝本解題—本邦中世期漢学研究のための—」（『日本漢学研究』第一号 1997年11月）
11. 田中克子 「『韻字記』と『聚分韻略』・『和訓押韻』『古今韻会举要』との関係」（『滋賀大国文』14号昭和52年〔1977〕）
12. 辻善之助 『空華日用工夫略集』太洋社 昭和14年（1939）
13. 中村 元 「「十二韻」の三本について」（『中世文芸論稿』12号 龍谷大学中世文芸談話会 1986年）
14. 中村 元 「『漢和三五韻』における『古今韻会举要小補』の利用について」（『国文学論叢』35輯 龍谷大学 1990年3月）
15. 中村 元 「聖護院蔵『和訓押韻<sup>東冬麻陽</sup>』影印・解説」（『中世文芸論稿』11号龍谷大学中世文芸談話会昭和63年〔1988〕3月）



16. 能勢朝次 『能勢朝次著作集』 思文閣 昭和 56 年〔1981〕
17. 日野龍夫 『仁斎日記』(『天理図書館善本叢書』和書之部第 70 卷八木書店 1985 年)
18. 深沢真二 「『漢和三五韻』の周辺」(『和漢比較文学叢書』16 俳諧と文学 1994 年)
19. 深沢真二 「『和訓押韻』考」(『国語国文』65 卷 第五号 1996 年 5 月)
20. 深沢真二 「雄長老と和漢聯句」(『国語と国文学』71 号 至文堂 1994 年 5 月)
21. 安田 章 『中世辞書論考』 清文堂 昭和 58 年 (1983)
22. 山田忠雄 『本邦辞書史論叢』 三省堂 1967 年

